

陳 述 書

平成27年 12月 25日

東京地方裁判所民事第36部合B1係 御中

住所 横浜市長南区岸が谷 2-24-8氏名 駒野 いづみ

1 ホタル館でボランティアに関わるようになった経緯

(1) 身上経歴

私は、平成19年頃から平成26年の1月まで、板橋区ホタル館で長くボランティアをしておりました。この間の平成23年に、イノリー企画という名前で、武蔵野種苗園から引き継いで能登町のクロマルハナバチの飼育販売事業のために女王蜂を供給するというのをしました。私としては、能登町への女王蜂の供給もボランティアの一環で、能登町や板橋区に頼まれてやっていたという認識でしたので、後になって、板橋区から阿部先生がイノリー企画の便宜を図っていたなどと言われるのは、全く不可解です。

これから、私が、ホタル館でボランティアをするようになった経緯や、イノリー企画を作った経緯、能登町へハチを供給するという事業を武蔵野種苗園から引き継いだ経緯について説明します。

(2) ホタルに関心を持つに至った経緯

まず、ホタル館でボランティアをするようになった経緯を説明します。

以前、私は、嫁ぎ先である世田谷区のお寺で、お世話になっている檀家さんの皆さんのためにクラシックのコンサートを開いたりするなどイベントを毎年のように行なっており、その際に寄付金を集めて、ユニセフを通してアフガニスタンの子どもたちのための募金活動をしておりました。そして、そのイベントの一環として、平成19年頃、お寺の境内でホタルを見て頂くという企画を考えました。

ちょうどその頃、友人を通して板橋区のホタル館のことを聞きましたので、ホタルの飼育の専門家である阿部先生にホタルの飼育方法を教えて欲しい、と思って、ホタル館を訪れたのが初めてのホタル館訪問です。

最初、阿部先生は、私に「難しい」、「ホタルの飼育は簡単ではない」と言い、教えていただけなかったのですが、半年程、私なりに懸命に試行錯誤した結果などを報告したところ、やっと熱意が通じて、徐々にアドバイスを頂

けるようになりました。

(3) ボランティアをするようになった経緯

そんなとき、私の家族に、とてもショッキングなことがありました。

高校野球に打ち込んでいた私の息子が、打球が当たる事故で失明寸前となり、大変ショックを受けてふさぎ込むようになったのです。当時、息子は、うつ病のように元気がなく、外出もほとんどしないような状態でした。

その頃、息子の怪我のことを知った阿部先生は、私に、息子をホテル館に連れて来てみないか、と声をかけて下さいました。

そして、初めてホテル館に行った息子に対し、阿部先生は、とても親切に接して下さい、そのときの体験を通して、息子は、少しずつ前向きな気持ちを持てるようになりました。

阿部先生と信頼関係を築いた息子は、悲観していた将来のことを考え始め、大学進学のことを相談するようになり、そして、ホテル館で当時飼育していたハチに関わるお手伝いをするボランティアをするようになりました。

その後、ホテル館でのボランティアと、阿部先生との交流を通して、息子は、大学に無事合格することができました。大学では、生物や環境の勉強をしておりました。

また、坂本区長も、私の息子のことはご存じで、とても好意的に接してもらいました。区長は、ホテル館を訪問した際、ボランティアを頑張っている息子を激励して頂き、あるとき、本をプレゼントしてくれたこともありました。

このようなことがあり、私にとっては、ホテル館や阿部先生は、私の家族を救ってくれた恩人なのです。

息子は、大学に入学してからは、ホテル館でハチの飼育をお手伝いするボランティアはできなくなりましたが、私は、恩返しの意味もあって、息子の代わりに、ハチの飼育のお手伝いをするようになりました。具体的には、ハチの飼育の小箱の掃除、糖液の製造などです。また、その他にも、徐々に、来館者の案内や掃除等の雑用もするようになりました。

このような経緯で、私は、ホテル館でボランティアをするようになったわけですが、長年、ほとんど毎日のように行っておりましたので、区長や主管課の方も私のことはよくご存じのはずです。

(4) 武蔵野種苗園との関わり

私は、平成22年頃、武蔵野種苗園から依頼を受け、ハチの飼育を手伝うアルバイトをするようになりました。私は専門家ではありませんが、ホテル館で長くハチの飼育のお手伝いをしていたことから、ハチに対する恐怖心もなく、飼育に関する基本的な知識があったからだと思います。

武蔵野種苗園では、週2、3回、朝9時から午後5時頃まで、阿部先生や綾部さんらが発明した特許技術に係わる休眠処理以外の、飼育全般をお手伝いしておりました。

なお、アルバイトをするようになってからも、武蔵野種苗園に行かない日などは、ホテル館で従前どおりボランティアをしており、週3回程は、行っていたと思います。

2 イノリー企画立上げについて

(1) 立上げ経緯

私は、平成21年、ホテル館で毎年恒例で行なっているホテル夜間公開の際に、ホテルオリジナルTシャツとブルゾン（上着）を作って販売することを企画しました。

そこで、ホテル館にいらっしゃった主管課の職員に事前に相談したところ、事前に申請の上で許可が必要であり、申請にあたっては、個人名の出ない別の事業体でやるよう指示を受けました。

そこで、実質は私個人の事業ではありますが、Tシャツ等の販売のための事業体を立ち上げることとなり、その名称を、私の嫁ぎ先がお寺だったため、ホテルと共に環境を守るという「祈り」を込めるという思いから、「イノリー企画」としたのです。

このような経緯ですので、私としては、継続的に事業を行なうことは全く考えておらず、その年の夜間公開の際のTシャツ等の販売以外は全く考えておりませんでしたから、会社組織にするような大げさなことにはしませんでした。

結局、その年の夜間公開で、確か100枚前後のTシャツとブルズンを販売し、合計20万円程の売り上げがあったように記憶しております。

なお、夜間公開にお越し頂いた、坂本区長にも購入して頂きました。

利益は、多くても、合計5万円程で、夜間公開後の反省会の場で板橋区の主管課に寄付を申出たのですが、結局は、いらぬといわれてしまいました。金額もわずかですし、正式な寄付の手続きを取るのが面倒だったからではないかと思います。

そのため、不本意ではありましたが、板橋区職員や関係者が参加した夜間公開の反省会に出すお弁当やお酒、飲み物代に充てたほか、ホテル館で使用する備品、カーテンや机などの購入費に充てました。

このように、当初から、イノリー企画は、平成21年のTシャツ等の販売のための事業体として立ち上げたものですから、そのイベントの後は、全く活動はありません。

私は、それまでと同じように、ホテル館でボランティアとして、ホテル飼育のお手伝いをしておりました。

(2) 武蔵野種苗園の撤退

平成22年末頃から、武蔵野種苗園は、経営上の問題からか、ハチの事業からの撤退を検討するようになり、この事態に、能登町や、ホテル館の阿部先生は、大変大慌てとなりました。

確か、阿部先生や綾部さん、川平さんらが、そのことで色々と話し合いをしていたように記憶しておりますが、当初は、まさか、私が武蔵野種苗園の事業を引き継ぐことになるとは思ってもおらず、私がお話し合いに参加することはありませんでしたので、私に話が来る前にどのような話をしていたか、については分かりません。

しかし、あるとき突然、阿部先生から、イノリー企画で後任を引き受けてくれないか、と頼まれました。

私としては、全く思っても見なかったことでしたが、阿部先生には息子のことでもお世話になっておりましたし、能登町の方々はそれまで研修等で何人もホテル館を訪問しており、多大な費用と時間を掛けてきたことも認識しておりましたし、後任者が見つからなければその苦労が無駄になってしまう、という想いもありました。また、当時、ホテル館でのホテル飼育のために武蔵野種苗園でのハチ飼育でできた土が必要だということや、日本在来マルハナバチの飼育販売事業が、日本の環境や生態系を救う、ということに共感しておりました。

そこで、後任者が見つからず、他に手段がないというのであれば、仕方ない、と引き受けたのです。

ただ、武蔵野種苗園では女王蜂一匹当たり7350円だったのが、1匹4500円と、条件が厳しくなっており、人件費等の賄っていけるのか、という不安で一杯でした。

なお、イノリー企画が後任を引き継ぐことについて、ホテル館で川平係長から、「頑張ってください」と激励してもらいました。

川平係長は、以前から何度もホテル館でお会いしており、好意的に接してくれ、イノリー企画のハチの供給事業が始まってからは、その事について度々私に「頑張ってください」と、お声かけしてもらっておりました。

このような経緯で、能登町や板橋区に頼まれて、ボランティアの一環として受け入れた、という認識でしたので、経費を賄っていけるか、という不安はありましたが、利益を得ようなど営利目的は全く考えにありませんでした。実際、売上げは人件費その他の実費で全てなくなってしまい、利益は全くありませんでした。

(3) 武蔵野種苗園からの引継ぎについて

そして、イノリー企画が武蔵野種苗園の後任をするにあたり、その開業届

については、提出時に私がボランティアとして活動していたのが、ホテル館だったことから、ホテル館の住所地を記載しました。

今回、私が開業届に書いたイノリー企画の住所地が問題となっていますが、ホテル館が実際にイノリー企画の活動拠点になったことはありません。イノリー企画の活動拠点は、能登町に送るハチの飼育していた成増です。

平成23年3月いっぱいまで武蔵野種苗園がハチの事業から撤退し、4月からイノリー企画がこれを引き継ぐ、とは言っても、当時は震災の影響もあり、また、急遽後任となったイノリー企画は、もともと活動実態がある事業体ではありませんでしたから、同年3月中は、全くと言ってよいほど引継ぎ作業はできておりませんでした。

このため、実際の引継ぎは平成23年4月中頃から5月にかけて行なわれました。

その頃、ホテル館の取り組み等に共感してくれた方が、成増にあるハチの飼育ができるスペースを、格安で賃貸してくれたため、少しずつ、武蔵野種苗園で飼育していたハチや、ハチの飼育に必要な小箱、大箱等を移設し、その成増の物件にて、ハチの飼育をするようになったのです。

当時のイノリー企画のメンバーは、ハチの事業撤退とともに武蔵野種苗園を辞めた綾部さん他3名でした。

私は、成増でハチの飼育を始めてからも、ホテル館で引き続きボランティアとして、来館者の案内や掃除等雑用をしておりましたが、能登町に送るハチの飼育をホテル館でしていたわけではありませんので、その点は誤解のないようお願いします。

なお、ホテル館で飼育していたハチは阿部先生が採取した長野県小諸市産のハチで、私たちが成増で育てて能登町に発送していたのは、能登町産のハチですので、もともと種が異なるものでした。

(4) ろ材等に使用する土の提供について

武蔵野種苗園の頃と同様、イノリー企画が後任を引き受けて以降も、ハチの飼育過程でできる土を、ホテル館に提供しておりました。

1週間に1度程だったか、バケツ1杯程の土を、私や綾部さんなど、イノリー企画のメンバーで、車でホテル館に運んでいました。

その頃、ホテル館のホテルの飼育では、武蔵野種苗園及び後任のイノリー企画が提供していた土が、ろ材等として使われており、板橋区は、以前に購入していたろ材等を購入しておりませんでした。

そのため、私たちが無償でこの土を提供することで、板橋区は利益を得ていたはずですが。

(5) 平成23年4月1日付「売買契約書及び秘密保持契約書」締結について

以上の経緯で、イノリー企画が武蔵野種苗園の後任を引き受けることとなり、能登町と、平成23年4月1日付けで、ハチの供給に関する契約を締結しました。

この契約書に、阿部先生の名前が入っていることについては、今までどおり、阿部先生が、能登町の依頼を受けて、出荷される女王蜂の個体に問題がないか確認したり、能登町が受け取った際に死亡していた個体や、飼育中に死亡していた個体をみてもらうという、能登町のための協力的行為を行なうということであり、これは、武蔵野種苗園が供給事業を行っていた頃の協力的行為と何ら変わりはありません。

また、板橋区は、イノリー企画がハチを能登町へ送る際のゆうパックの伝票の「依頼主」の「住所地」にホテル館の住所が記載されていたり、能登町からホテル館の阿部先生宛にハチの死亡個体が送付されていることを問題としておりますが、上記のとおり、阿部先生が能登町の依頼に応じて、ハチの個体のチェックをホテル館でしていたためです。

(6) 平成21年7月1日付「業務提携契約書」作成の経緯について

また、平成23年4月1日付上記契約書作成の際に作成した、平成21年7月1日付の業務提携契約書をもって、板橋区が、イノリー企画が阿部先生から、平成21年以降、不当に便宜を受けていたかのように主張しておりますが、全く事実と異なります。

そもそも、イノリー企画は、これまで説明したとおり、平成21年にTシャツとブルゾンを販売するために被告職員に指示されて作ったもので、当時、Tシャツとブルゾンの販売をした以外に全く活動実態がなく、阿部先生と業務提携を結ぶようなことはしておりません。

この契約書は、イノリー企画が、平成23年に武蔵野種苗園から後任を引き受けるために手続き上必要だということで、能登町からの要望を受けて、形式的に作成したものに過ぎないのです。

4 能登町のクロマルハナバチ飼育生産事業停止後の活動

(1) イノリー企画の活動休止

残念ながら、能登町の飼育販売事業は、1年で休止となりました。

このため、イノリー企画は成増の場所を引き払って、活動休止となり、私は、また元通り、ホテル館でボランティアをしておりました。

飼育していたハチは冷凍保存をして、その後は、大学等や欲しいと言ってくれるところに譲渡しました。

(2) 平成24年板橋区からの提案

以降、私は、ホテル館で従来どおりにボランティアをしておりましたが、

平成24年5月頃、一度、板橋区からNPO法人の立上げを提案されたことがありました。

当時の資源環境部長らが、ホテル館を訪れ、甲第32号証の図面を使って、ビジネスモデルを示して説明してくれたのですが、内容は、活動休止状態であったイノリー企画をNPO法人とし、板橋区と協定を結んで、ホテル館にて、「在来種（クロマルハナバチ）販売」を行い、その他、「ノウハウの提供」を行なうという事業をやったらどうか、ということでした。

つまり、能登町がやろうとしていた事業を、板橋区と私たちボランティアが立ち上げるNPO法人が共同して実現しようというものであり、板橋区はその事業のためにホテル館を貸し出すことで賃料を得ることができ、一方で、私たちボランティアはその収益によって人件費を賄うことができる、とのことでした。

そして、NPOが、ホテル館でハチの販売事業を始めるのを機に、施設名称を「ホテル等生物多様性学習館」（仮称）に変更することも提案しておりました。

結局、この提案を具体化することにはなりませんでしたが、板橋区は、このような、ホテル館を拠点とするクロマルハナバチの飼育販売事業を持ちかけるにあたり、イノリー企画が能登町のクロマルハナバチ飼育販売事業のためにハチの飼育供給を行っていたことや、阿部先生が被告職員として能登町の依頼を受けてノウハウを提供していたことを、念頭においていたことは明らかであると思います。

(3) 平成25年からの異常な経過

平成25年4月、井上課長がホテル館の主管課である資源環境課に配属となった頃から、急に、ホテル館を巡る板橋区の対応が変わりました。

井上課長が、ホテル館に来たときのことは、忘れもしません。

突然、「ボランティアは、自分の命令を聞け」、「役所の朝の朝礼に出ろ」と、大変高圧的な態度で、私たちを威嚇したのです。

私は、あまりの対応にショックを受け、困惑したため、直接、坂本区長に電話を掛け、このことを相談しました。

区長は、私を作ったTシャツやブルゾンを買って、実際に着てくれたり、息子に本をプレゼントしてくれたり、それまで、私たちにとっても好意的に接してくれておりました。

携帯電話の番号は、確か平成22年頃、私がボランティアをしていたときに、何でも相談して下さい、ということで、ホテル館を訪れた区長が直接私に教えてくれたのです。

区長は、井上課長の振る舞いについての私の相談を聞いて、「分かりました、どういう事実があったか調べて、連絡します」と言って下さいました。しか

し、結局、区長からその連絡が来ることはありませんでした。

それから後、大山の文化会館で開かれた民謡の会に参加した坂本区長にお会いした際、あの話はどうなったのか、と直接聞いてみましたが、その反応は余りに不可解なものでした。

私は、ボランティアに対する井上課長の態度が、余りに酷いものだと相談していたのですが、なぜか区長は、「板橋区は、大変なんだよ、財政が」、「コピー1枚取るのも大変なんだ」と、なぜかお金のことを言い出して、全く取り合ってくれませんでした。

当時は、何のことも訳も分かりませんでした。今、思い返せば、ホテル館の跡地を財政上有効利用をするため、ホテル館の閉鎖が必要で、そのためには、まず、阿部先生を始め私たちボランティアを追い出すことが区の方針として決まっていたのではないのでしょうか。

そのときの区長は、私や私の息子にさえ、好意的に対応してくれたそれまでの区長とは全く別人のようでした。

そして、平成26年1月27日。思い出すことさえ辛い日です。私がいつもどおりボランティアとしてホテル館に行ったとき、館内が大騒ぎで、何人もの区の職員や見知らぬ人たちが、ホテルの幼虫が何万匹も生息する「せせらぎ」に乱暴に足を踏み入れていたのです。

板橋区は「調査」と言っていますが、あれは、ホテルに対する暴力的な破壊行為に他なりません。あの日、どれだけのホテルの幼虫が命を失ったことか。あの事件をきっかけに、阿部先生はホテル館を去ることになりました。

私個人のことを申し上げますと、その後の平成27年1月30日に起きた事件も忘れられません。私がホテル館にいたところ、ホテル館の来館者を、井上さんが、酷く乱暴に来館者を追い返したため、意見を言ったところ、井上さんは逆上して私を突き飛ばしたのです。

わたしは、あまりの事態に過呼吸になり、区民が呼んでくれた救急車で、医師会病院に搬送されました。全治一週間の傷害と診断されましたが、このことについて、井上課長や板橋区からは、何の謝罪も受け取ってありません。大変ショックで、その後は、ホテル館の片付けに何度か行ったきりです。

あれほど沢山いたホテルはいなくなり、私が長年ボランティアをしていたホテル館は、今はもう見る影もなく、残念でなりません。

以上